様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：１２７０１
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ１２５２０

研究課題名（和文）18世紀朝鮮王朝の対清朝貿易の変容～物流および貿易品に着目して

研究課題名（英文）Changes of Choson Korea's trade with Qing China in the 18th Century

研究代表者
辻　大和（TSUJI, YAMATO）

横浜国立大学・大学院都市イノベーション研究院・准教授

研究者番号：５０６３２３０３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：18世紀朝鮮の対中国貿易の変化の内実はどのようなものであったのかという関心のもと、研究を進めた。その結果清が朝鮮に対して強く輸出を制限した物品があったこと、一方で朝鮮は燕行使貿易を進めて、開市貿易は官貿易にとどめ、さらに中国商人の流入を止めたり、海路開拓は進めなかったりなどの策を行ったこと、17世紀以降、次第に朝鮮社会内部で人蔘需要が確実にできていたことを明らかにし、研究成果を公表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は18世紀の東アジア研究に対して、国際貿易に関する朝鮮政府の対応状況の詳細な情報を提供する。日本社会では江戸時代および朝鮮に関する関心が高まっているが、同時代の朝鮮に関する日本語の研究は少数であった。本研究は歴史学的分析の事例を社会に提供し、韓国朝鮮理解の一助となるものである。

研究成果の概要（英文）：This study focused on the changes in Choson Korea's trade with Qing China in the 18th century. As a result, there were goods that China strongly restricted exporting to Korea. Korea government promoted tribute trade while restricting border trade, and prevented Chinese merchants to enter Korea. There was a growing demand for ginseng within Korean society after the 17th century.

研究分野：朝鮮王朝史

キーワード：韓国　朝鮮　貿易　朝貢　互市　嗜好品　人参　清朝

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近世東アジアの国際貿易の研究史をみると、17 世紀には日本→朝鮮→中国へと銀や銅が流れて行ったこと、中国→朝鮮→日本へ絹製品が流れ、朝鮮から日本へ薬用人蔘（天然）が流れた事実が明らかになっている。18 世紀には中国と朝鮮国境での開市貿易に関税が賦課され、また日本からの銀輸出が減少し、朝鮮で薬用人蔘が栽培開始された事実が明らかになっている。17 世紀と 18 世紀では、物品の国境での管理体制と、物品の流れに変動があったのである。

しかし、こうした中朝貿易の変容の、原因や影響はほとんど解明されていない。18 世紀における朝鮮の対清貿易での変化の内実はどのようなものであったのであろうか。それが本研究の核心をなす学術的「問い」である。

２.研究の目的

本研究の目的は、18 世紀の朝鮮の対清貿易の変容の内実を探ることであった。具体的には①中朝国境での開市に清が課税していった要因の解明、②朝鮮の日本からの銀輸入減少（主たる要因は江戸幕府による、銀輸出の抑制策）を受けて、朝鮮政府が対清貿易においてとった対策の内容分析、③朝鮮から清への栽培人蔘輸出拡大において朝鮮政府が果たした役割の解明、の 3 点を研究の主たる目的とした。

３.研究の方法

朝鮮と清との貿易は 17 世紀に始まり、19 世紀に終了するが、本研究は 18 世紀の朝鮮の対清貿易に限定し、貿易における物品（銀、人蔘など）の動向と政府の施策に焦点を絞った。そのために朝鮮と清両国の外交文書、記録、燕行録（朝鮮の対清外交使節による記録）を調査して、国境貿易の関税問題や、銀や人蔘などのモノの動向を分析した。

４．研究成果

2018 年度は日本国内での公刊資料調査と韓国での未公刊資料調査を進め、国際シンポジウム等で成果を発表した。国内での公刊資料調査として、朝鮮と清の年代記資料中の関係記事の収集・分析を行った。

2019 年度は前年度につづき台湾・中国での未公刊資料調査を行い、開市貿易の変容（特に関税）について分析を深め、発表を行った。台湾・中国での未公刊資料調査として、台北の国立故宮博物院、北京の中国第一歴史档案館などで調査を行った。

2020 年度は新型コロナウィルス感染拡大による国内移動の自粛、海外渡航の制限により、当初予定していた海外調査などは先送りせざるを得ず、これまで収集していた史料にもとづいて研究を深めた。

2021 年度は新型コロナウィルス感染拡大による国内移動の自粛、海外渡航の制限により、大きな制限を受けつつも、前年度からの研究の整理を中心に進めた。中朝貿易における管理の変容問題については、明の地理書『大明一統志』の輸入が、17～18 世紀の

朝鮮でどのように行われたのか、清朝によってどのように管理されたのか、という課題を中心に取り組んだ。前年度からの出張調査の制限を受け、もう一年度延長することにした。

2022 年度は朝鮮国内における薬用人蔘の栽培問題、朝鮮から清への輸出問題の調査研究に取り組んだ。日本国内で新型コロナウィルスに関係した国内移動や海外渡航の制限が緩和されたことを受け、国内外での調査、発表を行うことができた。調査としては 2019 年度以来約 4 年ぶりに韓国に渡航し、ソウル大学校奎章閣や国史編纂委員会などで文献調査を行うことができた。

以下では内容ごとに①中朝国境での開市の変容の問題、②朝鮮政府が対清貿易においてとった対策の内容分析、③朝鮮での栽培人蔘輸出拡大の三点から成果を整理する。

① 開市変容について

開市変容問題については、国家対国家の要素が時代を通じて強くみられることを明らかにした。具体的には 2019 年 6 月に韓国成均館大学校史学科 BK21＋事業団が主催する 2019 年国際学術大会で口頭発表「朝鮮後期外国との「開市（互市）」貿易の意義」を行った。その発表では朝鮮が中国と日本との間で行う国際貿易は、16 世紀末から 17 世紀初頭にかけて経路が多様化したとはいえるが、中国の国際貿易に比べると、対民間貿易の要素は低く、多くの場合は国家対国家の貿易であることが多かったことなどを指摘した。招待を受け韓国語で発表を行った。

その後、中朝国境で中国側の貿易管理が変化した事例を解明した。明の地理書『大明一統志』について、清代に入って清が朝鮮に対して強く輸出を制限したことについて整理し、学習院大学東洋文化研究所のミニシンポジウム「ミニシンポジウム「『一統志』研究の現在」において、「朝鮮燕行使の『大明一統志』輸入について」として口頭発表した。

その成果を小二田章、高井康典行、吉野正史編『アジア遊学 259　書物のなかの近世国家　東アジア「一統志」の時代』（勉誠出版、2021 年、総 288 頁）に「朝鮮燕行使の『大明一統志』輸入について」（202-213 頁）として掲載することができた。中国王朝が自らの領域の全体を明示すべく、各地域の歴史とデータを集積し作り上げた総合的書物「一統志」は元・明・清において編まれ、東アジア諸国や欧州へも伝播し、近代の地誌・歴史編纂にも影響を与えるものであったが、清代に入って朝鮮への輸出を清が制限したことなどを担当章で論じた。

そして当研究テーマに関するアウトリーチ活動として、横浜国立大学都市科学部編『都市科学事典』（春風社、2021 年、総 1052 頁）に「2-2-9 東北アジアの都市と国境」（140-141 頁）を発表した。この事典は横浜国立大学都市科学部が設置以来、全学教員および外部専門家の協力を得て編集した事典であり、文系理系双方の都市科学に関係する広範な項目を含む。

以上のように、中国側が確実に国境地帯での貿易管理を強化したことを明らかにした。

清が中江税を導入する環境が次第に整っていったといえるであろう。

② 朝鮮政府が対清貿易においてとった対策の内容分析、

18 世紀の対清貿易において、燕行使貿易による書物の輸入を進めるなど、朝鮮政府は清からの輸入を積極的に進めた一方で、国境地帯の往来禁制については清の禁制を受け入れたが、朝鮮側国境地帯の調査については強く抵抗したことを明らかにした。中国を代表する大学である復旦大学の文史研究院 に招待され「朝鮮与清朝間地理書交流〔朝鮮と清朝の地理書交流〕の発表を行った（2018 年 11 月 25 日 復旦大学文史研究院）。シンポジウムでは招待を受け中国語で発表を行った。発表した内容をもとに『全球視野中的明清鼎革』（中華書局、2023 年、総 509 頁）に「朝鮮与清朝間地理書的交流」（227-237 頁）として寄稿した。

また、朝鮮政府が対清貿易の担い手について加えたであろう制限について発表を行った。それは前述の燕行使貿易は積極的に進めた一方で、開市貿易は官貿易にとどめ、中国商人の朝鮮入境は防いでいたということである。そのことについて 2020 年 2 月に九州大学韓国研究センター定例研究会 「韓国前近代の国際関係 ― その構図 ・ 特質への視座」において口頭発表「朝鮮後期の華人商人について」を行った。その後華人商人が朝鮮を来訪することが少ないことや、海路開拓を政府が行わなかったことに着目して、18 世紀後半の海路貿易言説を検討し、新潟大学「近世・近代環東アジア地域における都市ネットワークに関する社会動態史研究」研究会（オンライン）において「朝鮮後期における外国人の入境について―華人商人を中心に」として口頭発表した。

朝鮮から清向けの輸出問題については 18 世紀につながる宣祖、光海君期には『東医宝鑑』などの編纂による国内物産の整理や、貿易推進の動きなどがあったことを『アジア人物史 7　近世の帝国の繁栄とヨーロッパ』（集英社、2022 年、総 808 頁）に「朝鮮王朝の国家的危機克服」（417-470 頁）として整理して掲載した。

以上のように、朝鮮は燕行使貿易を進めて、開市貿易は官貿易にとどめ、さらに中国商人の流入を止めたり、海路開拓は進めないなどの対策を行っていたりしていたことを明らかにした。

③ 朝鮮から清への栽培人蔘輸出拡大

人蔘の栽培開始について朝鮮よりも先行して栽培が本格化した近世日本の事例を調べ、京都大学東南アジア地域研究研究所共同利用・共同研究拠点「地域情報資源の共有化と相関型地域研究の推進拠点」（CIRAS）のディスカッションペーパー103 号に「江戸時代の諸国産物帳にみる薬用人蔘（オタネニンジン）の分布 ―仙台藩と土佐藩を中心に」を発表した（35-44 頁）。

これは 18 世紀に江戸幕府が対馬藩を介して薬用人参の種子などを朝鮮から入手したのち、日本全国で薬用人参の栽培が広がった現象について、特に仙台藩と土佐藩の動向

を解明したものである。そのなかで、仙台藩のような朝鮮半島開城と同緯度のエリアでの栽培実績があることと、土佐藩のような比較的低緯度での栽培実績があることをあきらかにした。

朝鮮でもその後全羅道など南部での栽培が広がるが、日本での比較的低緯度の実績があることを考えると、同時代の朝鮮南部での栽培開始は不自然なことではないことになる。

また、朝鮮での人蔘栽培開始に人蔘需要拡大がある可能性を吟味するため、朝鮮王朝期後期に人蔘の用途について検討した。韓国・朝鮮文化研究会第 22 回研究大会（オンライン）において「近世以降韓国における嗜好品としての薬用人蔘について」として口頭発表を行い、そこでの議論をもとに大坪玲子、谷憲一編『嗜好品から見える社会』（春風社、2022 年、総 424 頁）に「近世以降韓国における薬用人蔘製品の流通と消費」（391-414 頁）として掲載することができた。

この研究では韓国における人蔘製品の流通、消費に関わる展開を考察した。朝鮮時代の『朝鮮王朝実録』や士大夫の私的記録などで薬用として用いられた例を確認したうえで、薬用でない「人蔘茶」などの形態で、17 世紀ごろから飲まれ始めた例も同様に調べ、その内実に迫った。

人蔘の栽培問題は 10 月に開催された皇學館大学史学会で「朝鮮王朝と薬用植物」として発表した。

以上のことから人蔘栽培に関する朝鮮政府の役割は十分に検討できなかったが、外交用に限らず、17 世紀以降、次第に朝鮮社会内部で人蔘需要が確実にできていることは指摘した。

なおこのテーマに関係する関連文物の韓国における残存状況とその活用について、論文「コンテンツ時代における文化財」（7-17 頁）を『韓国朝鮮の文化と社会』18 号に発表した。「文化財」は韓国のどのような地域、時代のものを対象に資源化されたのか。どのような「文化財」が選好され（逆に排除され）、どのように変容したのか。そのなかで近現代の「文化財」化のあり方を問い直すことに関して、ソウルや安東の有形文化財を素材に問題提起する議論を展開した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 辻大和	４．巻 103
２．論文標題 江戸時代の諸国産物帳にみる薬用人蔘（オタネニンジン）の分布 ―仙台藩と土佐藩を中心に	５．発行年 2021年
３．雑誌名 CIRAS Discussion Paper	６．最初と最後の頁 35-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 辻大和	４．巻 18
２．論文標題 コンテンツ時代における文化財	５．発行年 2019年
３．雑誌名 韓国朝鮮の文化と社会	６．最初と最後の頁 7,17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　7件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 辻大和
２．発表標題 朝鮮王朝と薬用植物
３．学会等名 皇學館史学会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 辻大和
２．発表標題 近世以降韓国における嗜好品としての薬用人蔘について
３．学会等名 韓国・朝鮮文化研究会第22回研究大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 辻大和
２．発表標題 朝鮮後期における外国人の入境について―華人商人を中心に
３．学会等名 近世・近代環東アジア地域における都市ネットワークに関する社会動態史研究（新潟大学）（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 辻大和
２．発表標題 朝鮮燕行使の『大明一統志』輸入について
３．学会等名 ミニシンポジウム「『一統志』研究の現在（学習院大学東洋文化研究所）（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 辻　大和
２．発表標題 朝鮮後期外国との「開市（互市）」貿易の意義
３．学会等名 成均館大学校史学科BK21＋事業団2019年国際学術大会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 辻　大和
２．発表標題 泉田 浩子報告「近世日本における北東アジア認識 ―明清交替期の韃靼漂流を中心として」 へのコメント
３．学会等名 明清史夏合宿2019（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 辻　大和
２．発表標題 朝鮮後期の華人商人について
３．学会等名 九州大学韓国研究センター定例研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 辻大和
２．発表標題 朝鮮与清朝間地理書交流〔朝鮮と清朝の地理書交流〕
３．学会等名 シンポジウム『全球視野中的明清鼎革〔グローバルな視野のなかの明清交替〕、復旦大学文史研究院（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 辻大和
２．発表標題 朝鮮王朝からみた17 世紀初頭の「朝貢」と「互市」
３．学会等名 国際ワークショップ「越境する東アジア：16世紀後半―17世紀前半を中心に」（招待講演）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計5件

１．著者名 近藤信影，林佳世子,宮下遼，辻大和ほか	４．発行年 2022年
２．出版社 集英社	５．総ページ数 54
３．書名 アジア人物史7　近世の帝国の繁栄とヨーロッパ	

１．著者名 董少新，辻大和ほか	４．発行年 2023年
２．出版社 中華書局	５．総ページ数 11
３．書名 全球視野中的明清鼎革	

１．著者名 大坪玲子、谷憲一、辻大和ほか	４．発行年 2022年
２．出版社 春風社	５．総ページ数 24
３．書名 嗜好品から見える社会	

１．著者名 小二田章,高井康典行,吉野正史,辻大和ほか	４．発行年 2021年
２．出版社 勉誠出版	５．総ページ数 12
３．書名 アジア遊学259　書物のなかの近世国家　　東アジア「一統志」の時代	

１．著者名 横浜国立大学都市科学部	４．発行年 2021年
２．出版社 春風社	５．総ページ数 2
３．書名 都市科学事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

横浜国立大学　研究者総覧 https://er-web.ynu.ac.jp/html/TSUJI_Yamato/ja.html Researchmap https://researchmap.jp/yamtsuji

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関